

## 査定者としての成長と発達段階： 臨床家の生涯発達モデルによる検討

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科（現 香川大学教育学部） 橋本 忠行

私たちはどのようにして一人前の臨床家になるのだろうか？札幌学院大学心理臨床センターは、悩みを抱えたクライアントが変化・成長していく場であり、またそこでケースを担当する実習生（大学院生）、研修員（修士生）、研究員（教員）、そして相談室員にとっても、同じようにそれぞれの課題を大切にしながら成長することができる貴重な場であるように思う。本稿では、心理アセスメントを実践する査定者（Assessor）としての成長と、その発達段階について考えてみたい。

人間性心理学の文脈において、Ronnestad and Skovholt (2012) は臨床家の生涯発達モデルを表1のように提示している。半構造化面接とその質的分析から見出されたもので、「初学者の段階」から「後進を育てる専門職の段階」の5段階にまとめられた。このモデルは幅広く臨床家、つまり精神保健に携わる心理士やカウンセラー、ソーシャルワーカー等を想定しているため、本稿では焦点を査定者に絞りたい。そしてこのモデルを査定者の訓練と教育に適用し、どのような要素が重要なのか、（筆者の個人的な体験も踏まえながら）検討するのが目的である。

最初は「初学者の段階」で、大学院の修士課程とされる。Ronnestad and Skovholt (2012)によると、ここでの課題の1つは“実習を通して、アセスメントそして心理療法の手続きについて、十分な効力感（つまり適切に進めることができるという感覚）を獲得すること”である。個人的な体験として、ウェクスラー式知能検査とロールシャッハ法を実施する機会をこの時期に精神科病院で持てたのは大変貴重であった。統合失調症をはじめとした精神疾患が認知・思考機能に及ぼす影響を実感し、また同時にそれはそれとして“我々はなによりもまず同じ人間である”（Sullivan, 1953）という感覚が、野球やテレビの話題を通していつの間にか身体の中に浸透していった気がする。心理検査を標準化された手続きで実施すること、そこから得られたデータは分け隔てなく客観的なものであること、そしてそれらをクライアントの暮らしと結びつける大切さを学んだ。

2番目は「上級学習者の段階」である。インターンとスーパービジョンが中心で、ここでの課題は“情報と理論に対し開かれた態度をメタレベルで保ち続けると同時に、実際に使う心理療法の理論と技法について選択のプロセスを進め、自分に合わない理論については『幕を下ろす(closing off)』こと”とされる。当時こういった点を意識することはあまりなかったが、振り返るとロールシャッハ法の片口法を包括システムに移行したのは、そういった理由があったのかもしれない。

3番目は「初心の専門職の段階」である。課題の1つは“専門性への同一化を進め、自分が属する専門領域へコミットメントすること”とされ、その意味は理解できる。しかしながら実際のところ筆者にとっては少しばかり辛い時期でもあった。臨床心理士の資格を取得して2～3年後のことであったと思うが、

表1 臨床家としての5つの発達段階 (Ronnestad and Skovholt, 2012)

1	初学者の段階 (The Novice student Phase)
2	上級学習者の段階 (The Advanced Student Phase)
3	初心の専門職の段階 (The Novice Professional Phase)
4	熟練した専門職の段階 (The Experienced Professional Phase)
5	後進を育てる専門職の段階 (The Senior Professional Phase)

ケースカンファレンスや学会で心理アセスメント結果のフィードバックについて発表を行っても、「侵襲的ではないだろうか?」「フィードバックの前に、心理療法として取り組まなくてはならないことが前提としてあるのではないだろうか?」といったコメントを得ることが多かった。

一方で担当するケースが増え、またその領域も医療（大学病院精神科、総合病院精神科）、教育（中学校と高校のスクールカウンセラー、大学の学生相談）と広がり、それでもなお心理アセスメントの技術が一貫して役に立つことを実感する充実感もあった。同時に心理検査だけではなく、面接や観察を通じたアセスメントの重要さも学ぶことができた。そしてインテーク時などある時点での単一のアセスメントだけではなく、心理療法と併走しながら変化していくクライアントを継次的に捉える機会を持てるようになった。クライアントとつながりを持つ“関係構成技法としての検査法”（下山, 1997）を実践することで、以前と比べ面接の中断が減少したように思う。

4番目は「熟練した専門職の段階」である。査定者は異なった状況にあっても、適切な調整を行いながら機能できるようになる。課題は“一貫した専門職としての自己(self)との、偽りのない一致として体験されるような職務上の役割を作り出すこと”とされる。この一致は人間性心理学においてのみならず、心理アセスメントでも同じように重要だと思われる。Finn (2007) の日本語版「In our clients' shoes」(2014)の前書きには“時を経て、本書で説明したいくつかの技法よりも、その原理（協働、クライアントへの敬意、謙抑、共感）のほうはるかに大切であることがわかってきました。治療的アセスメントを異なる文化のなかで用いようとする場合には、この点は特に重要になります”とあり、実際この原理は私が出発点としての訓練で感じてきたことと一致する。

そして最後の5番目は「後進を育てる専門職の段階」で、Jennings et al. (1999)によると、「マスターセラピスト」の段階とも呼ばれる。Hirai (2010) は日米を比較し、そのいくつかの違いを明らかにする中で“日本人の治療関係は、その過程に参加する全ての人たちの旅路 (Journey) が、内省そして行動として共有された、心理学的な空間として記述される。そこでは厳密なゴールや結果が示されていないことも度々である”なことを抽出した。では、対象を少し狭めて本稿の主題である査定者にとってはどうか? クライアントの問いに沿うかたちで心理アセスメントを実施し、その結果について話し合う過程には内的な探索、そして旅路のメタファーはとでもじっくりくる。一方で治療的アセスメントの手続きは、話し合いの過程をまとめた「文書によるフィードバック」を含むこともあり、結果について、問いに従い文章として渡される点ではより米国の文化に近いように思う。心理アセスメントと文化というテーマはとでも大きく、近年少しずつ注目され始めた領域でもある。筆者がマスターセラピストの段階には至ってるとは到底思えないわけであるが、自分にとってのマスターセラピストないしメンターから学び続けることは、後進につなげていくためにも必要なのではないかと想像している。

冒頭に戻ると、札幌学院大学心理臨床センターはこれら5つの発達段階の学びと成長が毎日繰り返される貴重な場であるように思う。これから心理臨床センターに携わる未来の臨床家・査定者にそう伝えたく、また今改めてその思いを深くしている。

#### 〈付記〉

本稿は、2014年に開催された21th International Congress of Rorschach and Projective Methods (Istanbul University, Turkey) における Symposium Lecture “Future Training and Education of Psychological Assessment : USA and Japan” における口頭発表の一部をまとめたものである。企画を立ち上げてくださった京都大学大学院教育学研究科の高橋靖恵先生と同じく河本緑先生、西尾ゆう子先生、アメリカの訓練プログラムを紹介してくださったデンバー大学の Hale Martin 先生、そして指定討論を引き受けてくださった治療的アセスメントセンターの Stephen E. Finn 先生に改めて御礼を申し上げたい。

**文献：**

- Finn, S. E., (2007) : In our clients' shoes. Lawrence Erlbaum Associates: New Jersey. (野田昌道・中村紀子訳(2014) : 治療的アセスメントの理論と実際-クライアントの靴を履いて 金剛出版.)
- Hirai, T. (2010) : Personal and professional characteristics of Japanese master therapists: A qualitative investigation on expertise in psychotherapy and counseling in Japan (Unpublished doctoral dissertation). University of Minnesota, Minneapolis.
- Jennings, L., & Skovholt, T. M. (1999) : The cognitive, emotional, and relational characteristics of master therapists. *Journal of Counseling Psychology*, 46(1), 3-11.
- Ronnestad, M. H., & Skovholt, T. M. (2013) : *The Developing Practitioner. Growth and Stagnation of Therapists and Counselors*. Routledge: New York.
- 下山晴彦 (1997) : 臨床心理学研究の理論と実際 スチューデント・アパシー研究を例として 東京大学出版会.
- Sullivan, H. S. (1953) : *Conceptions of Modern Psychiatry*, 2nd ed. W.W.Norton & Co. New York. (Original work published 1940)